

俳諧日本國元祿十六年印本

附合の句

丸盆に塗笠きせるきらず買

友重

是等も當時塗笠のおとろへたる一證也、松の葉元祿十六年印本ぬり笠といへる端歌に、おかたぬり笠、七ねんはやい、すげ笠にかへておめまやれさ、あふみの笠はいよこの、さいたさなりはようて、びやくらいきようでさこれ當時のぬり笠は、老女のかぶる物になりて、若き女は菅笠をもはらにかぶりたる一證也、

〔近世女風俗考〕塗笠あみがさの事

寛文の末、延寶のはじめ頃までは、塗笠編笠を専ら著たり、延寶中頃より木地の葛笠といへるもの流行し、故此二品はすたりしなり、○中尾花元祿四年なる一之卷に、今日は殊さら長閑にて、祇園より知恩院まで、貴賤布引の男も女も思ひくに出立、去年の花の頃までは、○註女のぶんは見るもく、皆菅笠にてありしが、物は昔にもどるものかな、廿人の内四五人はさながら昔のなりにはあらねど、かるくとしたる塗笠、このぶんは、人の女房にも娘にも、ひと風俗をかまゆるはかくの如し、今日に菅笠にてかへらさるゝは、古當なる親仁持たる人は、小屋町の口のさがなきに、せんかたなくて著てありくとみえたり云々、元祿四年かくいへば、て、又塗笠にもどりのしなるべし、俳諧塗笠元祿十年印本序に、櫻かざして春の氣色を花葉にむすべし、畫どもにもさおほゆる證あり、玄々妙々たり、徒然の折ふし書集て塗笠となりけるは、今の世のはやり物、風姿のまほらしきに見くらべて云々、と識して、淺塗笠をいたきたる圖を出せさてむかしの塗笠には、金入紙、またはさまざまの繪やうかきたるものを、裏にはりし事ときこゆ、

〔嬉遊笑覽二〕塗がさ○中略猿樂には男女ともに塗笠を用また追分繪の藤花持たる女塗笠をき

たり、古き體と見ゆ、○中略松の落葉源五兵衛すんとくぼんだぬり笠云々、又傘舞殿は夏くべいと

て、夏は何をみやげに、すんとくぼんだぬり笠めそなりく、いつそとがり笠、ほそり笠とあり、今のすげ笠のやうにて、申のくぼみたる塗笠に、紅紐を上に通して結びたる女笠、享保二年花見の